小さな親切 新春号

CONTENTS
New Year 2018 ● No.509

② 北から南から 多くの参加者が集う
笑顔に涙に、心を揺さぶられた全国表彰式
●はがきキャンペーン大賞「日本郵便賞」作品
●作文コンクール「内閣総理大臣賞」作品
●受賞者名簿

⑧ 今年度の入賞作品に見る しんせつニューウェーブ

⑩ 今後起こりうる大災害への備え
「災害文化」が教えてくれること

⑪ 世代間交流にチャレンジ!
福井県立丹生高等学校／越前町支部

⑫ 地域は違えども 心はひとつ
平成29年度年度九州事務局長会議

⑬ コラム「これってどうなの?」／「のんちゃんのおすすめスポット」

⑭ Information & HIROBA

表紙写真
❶：日本の象徴・富士山（静岡県三島市）
❷：来宮神社の鳥居（静岡県熱海市）
❸：はがきキャンペーン審査員特別賞 受賞　宗像アキエさん
❹：待乳山聖天へお参り（東京都台東区）
❺：今年は戌年（東京・山谷堀公園）
❻：縁結びにご利益（東京・今宮神社）
❼：全国表彰式終了後のサイン会

「小さな親切」誌は、季刊発行
春号・5月、夏号・8月、秋号・11月、新春号・1月の予定です

平成30年1月25日発行　通巻509号
編集・発行人　鈴木恒夫
発 行 所　公益社団法人「小さな親切」運動本部
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-20-4
TEL.03-3263-2866　FAX.03-3263-3838
http://www.kindness.jp/
印 刷 所　広研印刷株式会社

© 無断転載禁止　落丁、乱丁はおとりかえいたします。

デザイン・DTP　有限会社リトルフット
イ ラ ス ト　P10：清水　稔／P13：安彦麻理絵

「オレが悪いんだヨ!!」

代表　鈴木恒夫

皆様、新年あけましておめでとうございます。お心をつなぎ合って「小さな親切」運動をお進めくださり、ほんとうにありがとうございます。この運動も今年で55年目。私ども本部も、いっそう努力して参ります。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

私はこの運動がスタートした1963年に、社会人の第一歩として毎日新聞社の記者になりました。いわゆる60年安保闘争の大激動から3年。新たな日本社会の構築をめざした茅誠司東大総長の提言に基づき、ご自身を含め8人の方々が提唱者として活動の先頭に立たれ、その中の一人が毎日新聞社の上田常隆氏（故人）。新潟で新米記者修行中の私は、応援気分で「新潟にも小さな親切の芽生えが」という記事を書いたものでした。

それ以来、政治記者、衆議院議員、文部科学大臣の仕事の中で、折にふれこの運動にご縁をいただいてきた私ですが、昨年11月末のこと、ある方の訃報を耳にしたとき、あらためて「あぁ、あの人のあの時の言葉、姿に……」と胸にこみ上げてきたものがあったことを思い出しました。「さすが、上田さんの後継者」とも。

その方は小池唯夫（ただお）さん。私より7年先輩の政治記者。上田さんの何代か後の毎日新聞の社長だった方です。昭和47年の日中国交回復という歴史的な日本の外交展開の前後、小池さんは“霞クラブ”と呼ばれる外務省担当記者たちのキャプテンで、サブキャップは前に当欄でも紹介した、5年先輩の岩見隆夫さん（故人）。

本土復帰前の沖縄の那覇特派員（当時は記者も外国並み）を終え、防衛庁（現在は省）詰めだった私は、ヤマ場にさしかかっていた日中交渉の取材に当たれと霞クラブ詰めへの配置転換。外務大臣は田中角栄首相の盟友の大平正芳氏で、私は何日もたたないうちに、大平外相の自宅で行われていた“夜コン”に初めて出されました。“夜コン”とは記者会見と違って、懇談の形で記事のネタを提供してくれるシステム。「外務省筋は……」とか書かせて、世論の反応を見る権力側の手法でもあります。

私は防衛担当の頃、全日空機と自衛隊戦闘機の空中衝突事件などに追いまくられ、とても外交問題にまで眼が回らぬ程だったので、懇談の中味の重さが理解できず、一語たりとも記事として書けず、翌朝、毎日新聞の“特オチ（落ち）”という大失態を招いてしまいました。“特オチ”とは“特ダネ”（スクープ）と逆の大恥さらし。私は小池キャップに「昨夜の外相説明の重さが全くわからず、ほんとうにすみません。どうか、どんな罰でもお与えください」とひれ伏しながら詫びを言いました。

すると、小池さんはなんと答えたか。「恒（つね）さん、オレのミスだヨ。霞クラブに来たばっかりのあんたに任せたオレが悪いんだ。恥をかかせて悪かった。許してくれヨ」。

私は今でもこの言葉が忘れられずにいます。「人を責める前に、まず、自分に落ち度がなかったか考えよ」との教訓。そして私は思ったものでした。「もしかすると、小池さんは上田元社長から“小さな親切”に象徴される人間の心の大切さを、なにかの機会に教え込まれていたのではないか」と。